

高校生が教員に求めている会話内容とは

小 黒 明日香 (愛媛大学教育学研究科 学校臨床学専攻)
富 田 英 司 (愛媛大学教育学部 教育心理学教室)

What Conversational Contents Do High School Students Want to Talk
with Teachers?

OGURO, Asuka and TOMIDA, Eiji

愛媛大学教育学部紀要

第56巻 抜刷

平成21年10月

高校生が教員に求めている会話内容とは

(愛媛大学教育学研究科 学校臨床学専攻) 小 黒 明日香
(愛媛大学教育学部 教育心理学教室) 富 田 英 司

What Conversational Contents Do High School Students Want to Talk with Teachers?

OGURO, Asuka & TOMIDA, Eiji

(平成 21 年 6 月 5 日受理)

要 約

本研究では、(1)「生徒が求める会話内容」、「生徒が求めているだろうと教員が考える会話内容」の違い、(2)不登校傾向のタイプ別ごとに生徒がどのような会話内容を求めているか検討した。定時制高校生127名、教員37名を対象に質問紙調査を実施した。求める会話内容としては友人、学校、将来、趣味、家族の5種類を設定し、それぞれについて「教師に自分から話したい程度」と「教師自身のことを聞きたい程度」を5件法で評定するように依頼した。その結果、(1)生徒は教員が思っているほど、教員に積極的に自分のことを話したいと感じていないことが分かった。他方、「教師自身のことを聞きたい程度」については、生徒の思いと教師の想定がほぼ同じであった。また、生徒は「将来」についての会話を教師に求めている一方、「家族」については求めていなかった。(2)「別室登校」「精神・身体」の不登校傾向が大きいほど、どの内容の会話でも教員の話を知りたいことが分かった。「遊び・非行」の不登校傾向が大きいほど、将来や趣味の会話を求めていることが分かった。「精神・身体症状」の不登校傾向を持つ者は、学校及び将来に関して自分のことを教師に話したいとは思っていないことが示された。「在宅希望」の不登校傾向を持つ生徒は、どのような内容であっても教師と話したいと思っていないことが分かった。

問題と目的

本研究は、教員が日常生活において様々な生徒とコミュニケーションをとるにあたり、どんな話題を話せばいいのかを明らかにすることを大きなねらいとしてい

る。そのため、高校生が教員とどのような会話を求めているのか、不登校生徒に焦点を当てて検討する。

不登校の現状

平成19年度の文部科学省の調査報告(文部科学省、2007)によると「不登校」(ここでは、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にあるため年間30日以上欠席した者で、「病気」や「経済的な理由」によるものを除いたものを指す)と認定されている生徒児童の数は、国、公および私立の小中学生が約13万人で全児童生徒数の1.2%にあたり、前年度より1.9%増加している。また、高校生では、理由別長期欠席者数が約10万人に登る。そのうち不登校と認定されているものが、約5万3千人と高等学校の全体の在籍者数の約1.56%にあたり、前年度より7.8%減少している。前年度より減少しているものの、全体からの割合としては高校生の不登校生徒の方が小中学生よりも多い。また、不登校状態が継続し、中途退学になる生徒が不登校生徒全体の37.3%、原級留置となる生徒が9.9%と高等学校では、小中学校とは異なり、不登校が継続することでの新たな問題が生まれることがいえる。文部科学省の調査でも、不登校が中途退学に結びついていることが明らかになっている。学校内での不登校生徒数が減少しても、学校などの社会に対応できない、家族以外の人とコミュニケーションが取れないなどの問題を抱え、長期に渡り家から出ずに過ごすひきこもりにも繋がるのではないかと考えられる。社会的な問題としては何も解決しないまま、成人を迎える青少年が増えることが予想される。

従来、高校生の不登校は、義務教育ではないためか、それほど問題視されてこなかった。しかし、高等学校で不登校に陥った生徒が、そのまま何らかの対応を受けずにいた場合、高等学校を退学することになる。そして、退学した生徒は、そのまま社会に出ることになると考えられる。すると、学校に適応できなかつたため、集団での生活や、基本的な知識を身につけず社会的に出ることになる。学校で適応できなかつた生徒が、いきなり社会で働くことは難しく、躓くことで自信をなくし、様々な仕事を転々とするなどして、定職につくことができなくなり、ニートに発展すると考えられる。そのため、高校での不登校の対応策は重要であると考えられる。

平成15年度に文部科学省は不登校の対応の在り方（文部科学省，2003）について報告し、不登校の基本的な考え方として5つの視点があげられた。その中でも、「働きかけることやかかわりを持つことの重要性」という視点は児童生徒との関わりを重要視しており、教員からの積極的な働きかけと、不登校状況に即した対応が大切であるとしている。さらに「将来の社会的自立に向けた支援の視点」は、不登校を「心」と「進路」の問題ととらえ、将来的な社会的自立を目的としている。これらのことから、生徒一人一人の状況に応じた関わりを、教員が積極的に行い、性格や能力に適した「進路」を共に考え、進んでいくことが必要であると考えられる。

生徒の考えや心を深く知るための教師の素養として、カウンセリングマインドが必要とされている。そのため、学校では教員のカウンセリング講習等が行われている。しかし、カウンセラーと教員ではカウンセリングマインドを持つことを「カウンセラーになること」と同一視している教員の存在も指摘されている（吉田，2007）。また、カウンセリングとは、あくまでもカウンセラーと来談者が閉じた空間で一時的に1対1で対峙する場面であり、普段の生活を共にするわけではない。そうであるからこそ、普段周りの人には言いにくい内容を相談として受ける役割をカウンセラーは担うことが可能である。それは、生徒からの情報提供が主となり、生徒からの働きかけがなければ、成り立たない営みであるといえる。

その一方で、教員は、普段の生活から、教員自身が生徒の状況や発言を通して、何らかを察し、教員自身から働きかけたり、積極的に会話をしたり、アドバイスをす

ることが可能である。この教員の役割は、生徒との関係を築いていく上で大変貴重なものであるといえる。その上で、教員はこの有利な状況を活かして、多様な状況にある生徒に合わせたコミュニケーションをとることが重要であろう。

先行研究

以上のように、学校の教員にとって、生徒への働きかけは非常に重要な役割を果たすと考えられるが、生徒の状況に応じた教員の働きかけについてはこれまでどのような研究がなされてきているだろうか。

網谷・菅野（2001）は、不登校のタイプ別に見た、教員の対応の在り方への意識に違いがあるのかを調査している。そこで、教員は不登校のそれぞれのタイプに適した対応を理解していることが明らかになった。その一方で、現状では教員が不登校生徒を前にして戸惑っていること、そして、不登校生徒に対する理解と実際の対応の間には、何らかのズレがあるのではないかと指摘している。教員は様々な不登校対応の在り方を理解しているが、実際には、生徒の考えていることが分からないという不安を抱え、生徒とコミュニケーションをとることが難しいと感じていることが示唆される。

山本（2007）は、不登校状態の測定尺度を作成し、それを使用して不登校生徒の状態を把握する方法をとり、不登校の対応、支援方法の検討を行っている。また、教員による不登校生徒への有効な支援方法を「態度」と「方策」に整理し、不登校の状態と支援の方法との関係も検討している。これは、教員の不安を解消するために、様々な不登校の傾向により異なる支援方法を学習指導、生活指導、登校援助の面から具体的に明らかにした研究である。

また、専門高校で進路相談をするにあたって、生徒が望む教員の対応は何かといった検討もなされている（佐藤・堂領・落合，2004）。この研究では、生徒を対象に「相談に行きたいと思う教師の対応」、「相談してよかったと思う教師の対応」を質問紙調査で明らかにしており、進路相談においての的確な教員の態度を検討している。また、「相談したい教員」の有無を、現在、過去を通して聞くことにより、それまでの教員の印象の違いで、現在の教員への相談のしやすさを検討している。

会話の重要性

会話は、普段の生活において教員が高校生、不登校生徒とコミュニケーションをとる上で、最も日常的に使用されている。それは、生徒の思いを直接聞くことができるからであると考えられる。様々な生徒の思いを教員が一方的に察し、それに準じた行動をとるのではなく、生徒の率直な思いに触れ、それに教員が対応できるからである。教員が生徒を理解する上で、会話はなくてはならないものであり、非常に重要であると考えられる。

上述のように、生徒が教員と会話をするにあたり、どのような態度での対応方法をとるべきかについては、いくつか研究がなされてきている。特に、会話に焦点を当てているものとしては、授業での生徒と教員のやりとりをの会話分析の手法を用いたの研究もなされてきている。しかし、教員と高校生、不登校生徒との会話に焦点を当て、教員が生徒に具体的にどういった内容の会話をすればよいかを検討している研究は筆者らの知る限り存在しない。

会話は一方的な関係で行えるものではなく、双方の実態や、関係が備わって初めて実現するものである。そのため、生徒の実態と教員の実態を共に検討し、両者からの視点で高校生、不登校生徒に有効な生徒と教員の会話内容を検討することが必要であると考えられる。

そこで本研究は、高校生を対象にし、生徒・教員の双方の視点からの実態を明らかにするため、生徒と教員の双方を対象に質問紙調査をおこなった。調査内容としては、生徒が教員と会話をするにあたり、教員とどのような内容の話をしたかを明らかにするため、生徒については「生徒が教員に求める会話内容」を調査した。また、教員に対しては、教員が普段の学校生活において、生徒がどのような会話を教員に求めていると想定しているか明らかにするため、「生徒が求めていると教員が想定している会話内容」について尋ねた。そして、生徒が求める会話内容と教員の想定にどのような違いがあるのかを検討した。また、生徒の不登校傾向と会話内容にどのような関係があるのかを検討するため、不登校傾向尺度（五十嵐・萩原，2004）を使用し、4つのタイプの不登校傾向について調査した。そして、不登校傾向の種類と求めている会話内容との関係を明らかにし、不登校傾向をもつ生徒に対して教員がどのような会話内容でアプローチ

すればよいかについても検討した。

方法

調査対象 A県内公立定時制高校に在籍する1・3学年の生徒177名、教員27名。生徒の構成は1年生89名（6クラス、男子44名、女子45名）、3年生88名（3クラス、男子49名、女子39名）。

当日欠席しており回答が得られなかった者を除いての生徒の構成は、1年生64名（6クラス、男子31名、女子33名）、3年生61名（3クラス、男子33名、女子28名）、計125名であり、回収率は71%であった。

定時制高校は、元来経済的な理由などで働きながら学ぶ生徒を育てることを目的としていたが、現在では中学校での不登校やいじめ、学力不足など多様な問題を抱えた生徒が在籍する。多様な立場の生徒からの声を聞くことができる環境であると考えられる。

また、不登校などの生徒指導を行う上でも困難な状況でありながらも教員は日々生徒指導を行い、いろいろな実践が試みられている。全日制の高校に在籍する教員よりも多様な生徒に関わる可能性の高い環境な為、生徒指導の現状を調査する上で有効であると考え定時制高校での調査をおこなった。

実施時期 2009年1月中旬から下旬。

調査内容 以下のA～Eについてをすべて5件法で質問紙調査をおこなった。

(1) 高校生に回答を求めた内容項目（Appendix 1）

フェイスシートでは学年、年齢、性別の記入を求めた。A「生徒が教員に話したい会話内容」24項目で、会話内容は、友人、学校、将来、趣味、家族の5カテゴリーになるよう想定して、質問項目を作成した。生徒が教員との会話において、自分自身がどういった内容の話をしたかを問う内容となっている。筆者らが今回新たに作成した。

B「生徒が教員から聞きたい会話内容」37項目で、Aと同様の5カテゴリーから成る。生徒が教員との会話において、教員よりどのような話を聞きたいかと問う内容となっている。筆者らが今回新たに作成した。

C「不登校傾向尺度」別室登校を希望する不登校傾向、遊び・非行に関連する不登校傾向、精神・身体症状を伴う不登校傾向、在宅を希望する不登校傾向の4因子構造

から成る。五十嵐・萩原(2004)が作成したものをを用いた。

(2) 教員に回答を求めた内容項目 (Appendix 2)

フェイスシートでは年齢、性別の記入を求めた。

D「教員が考える『生徒が教員に話したい会話内容』」24項目で、Aと同様の5カテゴリーから成る。生徒と教員との会話において、生徒が自分自身のどのような話をしたいと考えているかを想像し、教員に問う内容となっている。筆者らが今回新たに作成した。

E「教員が考える『生徒が教員から聞きたい会話内容』」37項目で、Aと同様の5カテゴリーから成る。生徒と教員との会話において、生徒がどのような話を教員に話してほしいと考えているかを想像し、教員に問う内容となっている。筆者らが今回新たに作成した。

調査手続き 生徒への調査は、各クラスの担任の教員にお願いした。それぞれのクラスのホームルームの時間に教員が質問紙を配布し、時間は15分で、回答したものから各自で担任の教員に提出する方法で実施を行なった。また、教員への調査は、代表の教員にお願いした。代表の教員が質問紙を配布し、時間は決めず、回答したものから各自で代表の教員に提出する方法で実施を行なった。

結果と考察

本研究では、以下の手順で分析をおこなった。はじめに、調査した質問紙の調査項目の信頼性を検討するため、生徒用、教員用それぞれの「教員に話したい会話内容」、「教員から聞きたい会話内容」の項目(主に「友人」、「学校」、「将来」、「趣味」、「家族」の5カテゴリー)、不登校傾向尺度の4項目のCronbachの α 係数を算出した。また、それぞれのカテゴリーの関係を検討するため、会話内容間、不登校傾向間それぞれの相関係数を算出した(1-(1))。

次に、生徒を対象に調査した、「生徒が望む会話内容」および「不登校傾向尺度」の基本統計量と学年差、性差を検討した。生徒が望む会話内容の学年差と性差を要因とする2要因分散分析(混合計画)をおこなった。そして、不登校傾向の学年差と性差を要因とする、2要因分散分析(混合計画)をおこなった(1-(2))。

次に、生徒と教員間の会話においての会話内容の基本統計量と方向性、グループの差を検討した。そこで、生

徒と教員間の会話においての会話内容の方向性、グループ差を要因とする3要因の分散分析(混合計画)をおこなった(1-(3))。

最後に、生徒の「不登校傾向尺度」の4つの尺度得点と「話したい会話」、「聞きたい会話」との関連を検討するため相関係数を算出した。また、生徒全体の不登校傾向の平均分布を示した(Figure 1~4)(2)。

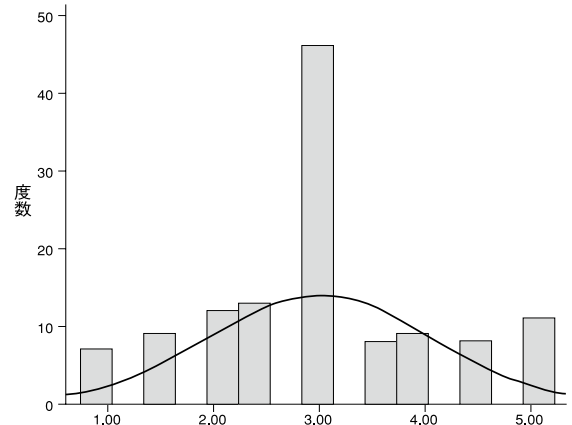


Figure 1 在宅を希望不登校傾向の分布
M=2.68 N=123

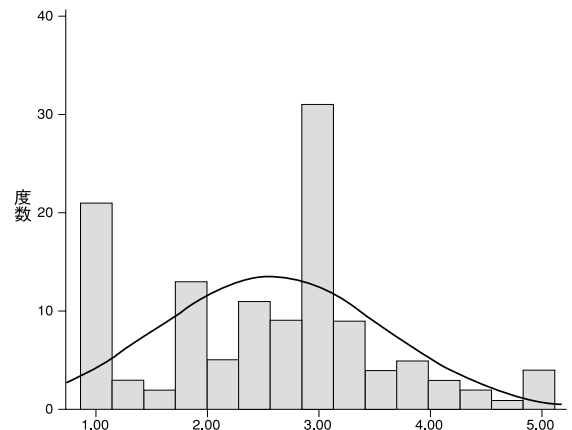


Figure 2 遊び・非行不登校傾向の分布
M=2.58 N=123

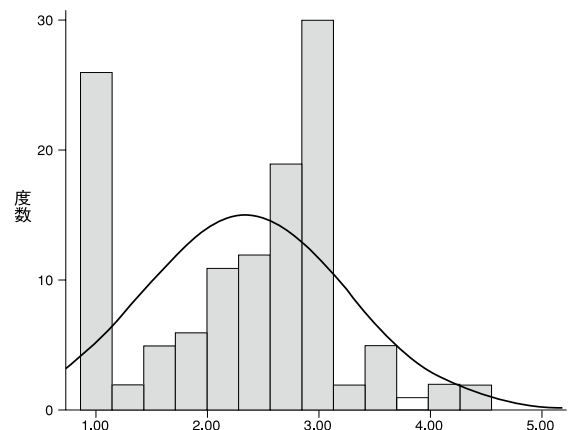


Figure 3 精神・身体症状不登校傾向の分布
M=2.28 N=123

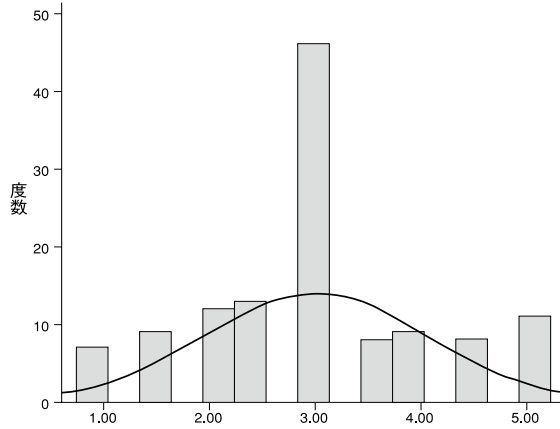


Figure 4 在宅希望不登校傾向の分布
M=2.29 N=123

1. 高校生が求める会話内容と教員が考える会話内容との差

(1) 調査項目の信頼性

生徒用, 教員用それぞれの『教員に話したい会話内容』および『教員から聞きたい会話内容』に含まれるカテゴリー（「話したい会話」友人, 学校, 将来, 趣味, 家族, 5カテゴリーの会話内容, 「聞きたい会話」友人, 学校, 将来, 趣味, 家族, 5カテゴリーの会話内容, 合計10カテゴリー, 生徒・教員用があり, 全合計20カテゴリー）の信頼性を検討するため, Cronbachの α 係数を算出した。その結果, 生徒用『教員に話したい会話内容』での, 「友人」 $\alpha = .87$, 「学校」 $\alpha = .93$, 「将来」 $\alpha = .88$, 「趣味」 $\alpha = .89$, 「家族」 $\alpha = .95$, 『教員から聞きたい会話内容』での, 「友人」 $\alpha = .97$, 「学校」 $\alpha = .97$, 「将来」 $\alpha = .96$, 「趣味」 $\alpha = .98$, 「家族」 $\alpha = .99$ であった。また, 教員用『教員に話したい会話内容』での, 「友人」 $\alpha = .61$,

「学校」 $\alpha = .71$, 「将来」 $\alpha = .71$, 「趣味」 $\alpha = .71$, 「家族」 $\alpha = .91$, 『教員から聞きたい会話内容』での, 「友人」 $\alpha = .61$, 「学校」 $\alpha = .83$, 「将来」 $\alpha = .85$, 「趣味」 $\alpha = .85$, 「家族」 $\alpha = .99$ であった。教員用『教員に話したい会話内容』での, 「友人」項目のみ信頼性が低く, 検討が必要であるが, その他の項目においては高い値であった。また, それぞれのカテゴリーが違うものであることを確認するため, 会話内容（「話したい会話」友人, 学校, 将来, 趣味, 家族, 5カテゴリーの会話内容, 「聞きたい会話」友人, 学校, 将来, 趣味, 家族, 5カテゴリーの会話内容, 合計10カテゴリー）間の相関係数を算出した (Table 1)。

Table 1 不登校傾向間相関

	遊び・非行	精神・身体	在宅希望
別室登校	0.64 **	0.56 **	0.07
遊び・非行		0.51 **	0.19 *
精神・身体			0.16
		**p<.001	*p<.005

生徒のみを対象に調査した不登校傾向尺度（五十嵐・萩原 2002）の因子パターンの4項目（別室登校, 遊び・非行, 精神・身体, 在宅希望）においても信頼性を検討した結果, 「別室登校を希望する不登校傾向」 $\alpha = .88$, 「遊び・非行に関連する不登校傾向」 $\alpha = .87$, 「精神・身体症状を伴う不登校傾向」 $\alpha = .79$, 「在宅を希望する不登校傾向」 $\alpha = .51$, と「在宅を希望する不登校傾向」のみ低い値であった。また, それぞれのカテゴリーが違うものであることを確認するため, 不登校傾向の4因子間の相関係数を算出した (Table 2)。

(2) 生徒が望む会話内容と不登校傾向の基本統計量

Table 2 会話内容間相関

	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 話 (友人)	.76 **	.62 **	.76 **	.59 **	.63 **	.64 **	.63 **	.58 **	.53 **
2 した (学校)		.73 **	.70 **	.62 **	.63 **	.67 **	.64 **	.56 **	.50 **
3 たい (将来)			.64 **	.61 **	.67 **	.66 **	.70 **	.57 **	.53 **
4 会 (趣味)				.73 **	.70 **	.74 **	.69 **	.71 **	.61 **
5 話 (家族)					.63 **	.64 **	.59 **	.60 **	.64 **
6 聞 (友人)						.91 **	.83 **	.80 **	.79 **
7 き (学校)							.88 **	.87 **	.82 **
8 たい (将来)								.85 **	.79 **
9 会 (趣味)									.80 **
10 話 (家族)									

**p<.001

生徒を対象に調査した、生徒が望む会話内容の基本統計量を算出した (Table 3)。また、不登校傾向尺度の基本統計量も算出した (Table 4)。まず、生徒が望む会話内容 (「話したい会話」友人、

Table 3 生徒の会話内容の基本統計量

		男子		女子	
		1年	3年	1年	3年
		M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)
【会話内容】					
話したい会話	友人	3.17 (.68)	2.20 (.53)	1.63 (.59)	2.25 (.48)
	学校	3.17 (.65)	2.13 (.50)	1.66 (.56)	2.79 (.46)
	将来	3.25 (.68)	2.00 (.53)	1.81 (.59)	3.00 (.48)
	趣味	3.00 (.71)	2.15 (.55)	2.19 (.61)	2.50 (.50)
	家族	3.00 (.46)	1.47 (.36)	1.83 (.40)	1.92 (.32)
聞きたい会話	友人	3.00 (.70)	2.20 (.54)	1.88 (.60)	2.71 (.49)
	学校	3.08 (.67)	2.20 (.52)	1.91 (.58)	2.69 (.47)
	将来	3.13 (.66)	2.24 (.51)	2.10 (.57)	3.03 (.47)
	趣味	2.71 (.71)	2.23 (.55)	2.06 (.61)	2.90 (.50)
	家族	2.80 (.52)	1.73 (.40)	1.83 (.45)	2.58 (.37)

Table 4 不登校傾向の基本統計量

	男子		女子	
	1年	3年	1年	3年
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)
【不登校傾向】				
別室登校	2.24 (1.16)	2.18 (.95)	2.51 (1.03)	2.29 (1.11)
遊び・非行	2.59 (1.01)	2.85 (1.09)	2.55 (1.07)	2.36 (.90)
精神・身体	2.34 (.93)	2.04 (.86)	2.30 (.89)	2.46 (.80)
在宅希望	2.83 (1.01)	3.12 (1.11)	2.92 (1.02)	3.11 (1.08)

学校、将来、趣味、家族、5カテゴリーの会話内容、「聞きたい会話」友人、学校、将来、趣味、家族、5カテゴリーの会話内容、合計10カテゴリー)の学年差(1年生・3年生の2カテゴリー)と性差(男子・女子の2カテゴリー)を検討するために、2要因分散分析(混合計画)をおこなった。会話内容(被験者内要因)、学年差(被験者間要因)、性差(被験者間要因)を要因とした。その結果、学年差 ($F(9,1053) = 1.58, .n.s.$), 男女差 ($F(9,1053) = 1.11, .n.s.$), それぞれに有意な主効果がみられなかった。また、交互作用もみられなかった ($F(9,1053) = 1.461, .n.s.$)。

次に、不登校傾向の学年差(1年生・3年生の2カテゴリー)と性差(男子・女子の2カテゴリー)を検討するために、2要因分散分析(混合計画)をおこなった。不登校傾向(被験者内要因)、学年差(被験者間要因)、性差(被験者間要因)を要因とした。その結果、学年差 ($F(3,351) = 1.24, .n.s.$), 男女差 ($F(3,351) = 2.09, .n.s.$),

それぞれに有意な主効果がみられなかった。また、交互作用もみられなかった ($F(3,351) = 1.64, .n.s.$)。

以上の分析から、生徒が教員に望んでいる会話内容での会話内容の違い、不登校傾向の種類の違いにおいて、学年差、性差は関係していないことを示唆している。一般的に学年や性差の違いにより、教員に求めるものや、興味の違いがあると考えられがちであるが、そうではないことが考えられる。

(3) 会話内容における教員・生徒のグループ差の検討
生徒と教員間の会話における会話内容(友人、学校、将来、趣味、家族)の基本統計量と方向性、グループの差を算出した (Table 5)。

そして、生徒と教員間の会話における会話内容(友人、学校、将来、趣味、家族、の5カテゴリー)の方向性(「話したい会話」・「聞きたい会話」の2カテゴリー)、グループ差(生徒・教員の2カテゴリー)を検討するため3要因の分散分析(混合計画)をおこなった。会話内

容（被験者内要因）、会話方向（被験者内要因）、グループ（被験者間要因）を要因とした。

その結果、会話内容 ($F(4,518) = 22.60, p < .001$), 会話方向 ($F(1,147) = 12.90, p < .001$), グループ間 ($F(1,147) = 6.12, p < .05$), それぞれに有意な主効果がみられた。会話方向では、生徒が話したい値が高く ($p < .001$), グループ間では、教員の値が高かった。会話内容とグループ間 ($F(4,518) = 3.94, p < .05$), 会話方向とグループ間 ($F(1,147) = 27.44, p < .001$) に一次の交互作用がみられた。また、二次の交互作用はみられな

かった ($F(4,511) = .401, .n.s.$)。会話内容について多重比較をおこなったところ、グループ「生徒」において「家族」($p < .001 \sim .05$)と「将来」($p < .001 \sim .05$)についての会話内容間の差が有意であり、「家族」よりも「将来」についての会話内容の得点が高かった。会話方向で単純主効果を分析したところ、グループ間の要因において、会話方向の「聞きたい会話」が有意であり、「聞きたい会話」の値が生徒よりも教員の値が高かった ($p < .001$)。

以上の分析から、教員の考えとは反対に、生徒は教員

Table 5 各変数の基本統計量とグループ差・会話方向

	生徒		先生		主効果 グループ F 値
	話したい会話	聞きたい会話	話したい会話	聞きたい会話	
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	
友人	2.82 (.98)	2.90 (1.01)	3.59 (.76)	3.10 (.67)	4.75 *
学校	2.86 (.85)	2.90 (.98)	3.74 (.52)	3.18 (.53)	12.56 *
将来	2.99 (.98)	2.99 (1.01)	3.71 (.70)	3.10 (.67)	4.38 *
趣味	2.78 (.93)	2.87 (.96)	3.30 (.48)	2.97 (.46)	2.44
家族	2.53 (.91)	2.77 (.95)	3.04 (.70)	2.67 (.63)	0.64

** $p < .001$ * $p < .005$

に話すよりも、教員から話を聞きたいと感じていることを示唆している。その一方で、生徒と教員の会話内容の種類においての大きなズレはなかった。また、生徒は会話内容として、「将来」について話したい、反対に「家族」について話したくないと生徒は感じていることが分かった。

つまり、教員は生徒が望む会話内容をしっかりと理解しているといえる。しかし、教員が考えているほど生徒は積極的に自分から話したいとは感じていないという相互の理解にズレが生じているのではないだろうか。これには、教員からの働きかけが必要であると考えられる。その際、教員が現在持っている、理解を重視し、今回明らかになった結果を参考に、「将来」についての会話を取り入れ、「家族」についての会話に配慮することが必要ではないかと考えられる。

2. 不登校傾向による会話内容の違い

生徒の「不登校傾向尺度」の4つの尺度得点と「話したい会話」、「聞きたい会話」との関連を検討するため相

関係数を算出した (Table 6)。また、基本統計量として、生徒全体の不登校傾向の度数分布図を作成した (Figure 1~4)。

分析の結果、「別室登校」は、教員より聞きたい会話のどの会話内容も全体に相関が高く、教員に話したい会話では、「友人」、「趣味」の会話内容の相関が高かった。「遊び・非行」は、教員に話したい会話では、「将来」、「趣味」の内容との相関が高く、教員より聞きたい会話では、「友人」との相関が高かった。また、どちらの会話でも「家族」の内容との相関が低かった。「精神・身体症状」は、教員より聞きたい会話のどの会話内容も全体に相関が高く、話したい会話の「学校」、「将来」との相関が低かった。「在宅希望」は、どの会話内容においても唯一、負の相関が見られた。

以上の分析より、「別室登校」傾向のある生徒は、「友人」、「趣味」の内容を教員に話したいと感じていることが示唆される。また、どの様な会話内容でも教員の話を聞きたいと感じているため教員からの積極的なかわり、会話が必要であると考えられる。

Table 6 不登校傾向と生徒が「話したい会話」・「聞きたい会話」内容との相関係数

	話したい 会話(友人)	話したい 会話(学校)	話したい 会話(将来)	話したい 会話(趣味)	話したい 会話(家族)	聞きたい 会話(友人)	聞きたい 会話(学校)	聞きたい 会話(将来)	聞きたい 会話(趣味)	聞きたい 会話(家族)
不登校傾向										
別室登校	.30 **	.23 *	.22 *	.34 **	.22 *	.31 **	.27 **	.25 **	.26 **	.25 **
遊び・非行	.23 *	.20 *	.24 **	.29 **	.17	.26 **	.21 *	.18 *	.16	.16
精神・身体	.20 *	.10	.16	.28 **	.23 *	.29 **	.24 **	.24 **	.21 *	.25 **
在宅希望	-.33 **	-.32 **	-.24 **	-.29 **	-.27 **	-.28 **	-.33 **	-.31 **	-.31 **	-.28 **

**p < .001 *p < .005

「精神・身体症状」傾向のある生徒は、「学校」, 「将来」の内容を教員と話したくないと感じていることが示唆される。また、「別室登校」傾向のある生徒とどの様に、どんな会話内容でも教員の話を知りたいと感じているため教員からの積極的なかわり、会話が必要である。

「遊び・非行」傾向のある生徒は、「将来」, 「趣味」の内容を教員に話したいと感じている。「友人」の内容の話を教員から聞きたいと感じている。また、どちらの会話でも「家族」の内容の話をしたくないと感じていることが示唆される。つまり、「家族」の内容の話を避け、「将来」, 「趣味」といった本人自身の内容についての会話を教員が聞くことが必要であると考えられる。

「在宅希望」傾向のある生徒は、どの会話においても教員と話したくないと感じていることが示唆される。そのため、会話内容を工夫することでのコミュニケーション改善は困難であり、他のアプローチからの検討が必要であると考えられる。

本研究の問題点と今後の課題

本研究は、生徒が求める会話内容、教員が考える生徒が求める会話内容を明らかにすること、不登校傾向の種類によって求める会話内容がどのように異なるか検討することを目的とし、質問紙調査をおこなった。

これらの結果は普段、学校生活においての生徒への積極的な働きかけを工夫する上において、有用な知見であると考えられる。しかし、明らかになった会話内容を有効に活用し、積極的に生徒と接するためには、会話内容はもちろん、会話をおこなうタイミングや、場所、頻度などの様々な工夫が必要である。本研究は、会話内容以外での具体的なアプローチについては未だ検討していない。

そのため、本研究の今後の課題として、学校での生徒

の実態を知るといった現状把握、会話内容を有効に使用するための生徒との関わり方、会話をおこなうタイミングなどの具体的な工夫を明らかにするために、教員の体験などを踏まえた内容を直接聞くといったことが必要であると考えられる。これらを明らかにすることにより、現在不登校に陥っている不登校生徒への教員の積極的なアプローチの一資料になるであろうと考えられる。

また、本研究では、本調査における調査対象校が1校であったことから、本研究の結果を過度に一般化することはできないと考えられる。そのため、今後は調査対象校、対象校の学校携帯を増やし、様々な本研究の結果を確認することが必要であると考えられる。

引用文献

網谷・菅野 (2001). 不登校に関する教師の意識—教師の登校重視度および不登校のタイプとの関連— 広島大学大学院教育学研究科紀要, 50, 333-339.

五十嵐哲也・萩原久子 (2004). 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究, 52, 264-276.

佐藤・堂領・落合 (2004). 専門高校における教育相談で高校生が望む教員の対応 筑波大学心理学研究, 28, 69-77.

山本奨 (2007). 不登校状態に有効な教師による支援方法 教育心理学研究, 55, 60-71.

吉田圭吾 (2007). 教師のための教育相談の技術 金子書房

文部科学省 (2007). 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 文部科学省初等中等教育局児童生徒課

文部科学省 (2003). 不登校への対応について 文部科学省初等中等教育局児童生徒課

謝 辞

調査実施に際して御協力をいただきました高等学校の先生方ならびに生徒の皆様には厚く御礼申し上げます。

Appendix 1 (1) 生徒への質問項目

A 「生徒が『教員に話したい会話内容』」			
友人 $\alpha = .87$	1	あなたと友人との関係でうれしかったことについて	
	2	あなたと友人との関係での悩みについて	
学校 $\alpha = .93$	3	好きな科目のことについて	
	4	苦手な科目のことについて	
	5	好きな先生のことについて	
	6	苦手な先生のことについて	
	7	あなたと部活動の仲間、先輩との関係でうれしかったことについて	
	8	あなたと部活動の仲間、先輩との関係での悩みについて	
	9	部活動で楽しいと感じていることについて	
	10	部活動の練習や試合での苦勞について	
	将来 $\alpha = .88$	11	希望する将来の希望や望みについて
		12	進級や進路などの将来への不安について
13		10年後の自分がどんな人間になりたいかの人生プランについて	
14		進学費用などの具体的な相談について	
趣味 $\alpha = .89$	15	よく見るテレビ番組について	
	16	よく読む本について	
	17	よく聞く音楽について	
	18	最近、友達や周りで流行っていることについて	
家族 $\alpha = .95$	19	あなたと親との関係でうれしかったことについて	
	20	あなたと親との関係での悩みについて	
	21	あなたと兄弟との関係でうれしかったことについて	
	22	あなたと兄弟との関係での悩みについて	
	23	あなたと祖父母との関係でうれしかったことについて	
	24	あなたと祖父母との関係での悩みについて	
B 「生徒が『教員から聞きたい会話内容』」			
友人 $\alpha = .97$	1	先生が高校生の頃、友達との関係でうれしかったことについて	
	2	先生が高校生の頃、友達との関係での悩みについて	
	3	先生が現在、友達関係でうれしかったことについて	
	4	先生が現在、友達関係での悩みについて	
学校 $\alpha = .97$	5	先生が高校生の頃、好きだった科目のことについて	
	6	先生が高校生の頃、苦手だった科目のことについて	
	7	先生が高校生の頃、好きだった先生について	
	8	先生が高校生の頃、苦手だった先生について	
	9	先生が高校生の頃、部活動の仲間、先輩との関係でうれしかったことについて	
	10	先生が高校生の頃、部活動の仲間、先輩との関係での悩みについて	
	11	先生が高校生の頃、部活動で楽しいと感じていたことについて	
	12	先生が高校生の頃、部活動の練習や試合で苦勞したことについて	
将来 $\alpha = .96$	13	先生が高校生の頃、将来の希望や望みについて	
	14	先生が高校生の頃、進級や進路などの将来へ不安だったことについて	
	15	先生が高校生の頃考えた、10年後の自分がどんな人間になりたいかの人生プランについて	
	16	先生が高校生の頃に受けた進学費用などのアドバイスについて	
	17	先生が現在から10年後の自分がどんな人間になりたいかの人生プランについて	
趣味 $\alpha = .98$	18	先生が高校生の頃、見たテレビ番組について	
	19	先生が高校生の頃、読んだ本について	
	20	先生が高校生の頃、聴いた音楽について	
	21	先生が高校生の頃、友達や周りで流行っていたことについて	
	22	先生が現在、よく見るテレビ番組について	
	23	先生が現在、よく読む本について	
	24	先生が現在、よく聴く音楽について	
	25	先生が現在、友人や周りで流行っていることについて	
家族 $\alpha = .99$	26	先生が高校生の頃、先生と親との関係でうれしかったことについて	
	27	先生が高校生の頃、先生と親との関係での悩みについて	
	28	先生が現在、先生の親との関係でうれしかったことについて	
	29	先生が現在、先生の親との関係での悩みについて	
	30	先生が高校生の頃、先生の兄弟との関係でうれしかったことについて	
	31	先生が高校生の頃、先生の兄弟との関係での悩みについて	
	32	先生が高校生の頃、先生と祖父母との関係でうれしかったことについて	
	33	先生が高校生の頃、感じた祖父母との関係での悩みについて	
	34	先生が先生の夫・妻との関係でうれしかったことについて	
	35	先生が先生の夫・妻との関係での悩みについて	
	36	先生が先生の子どものとの関係でうれしかったことについて	
	37	先生が先生の子どものとの関係での悩みについて	

Appendix 2 (2) 教員への質問項目内容

D 「教員が考える『生徒が教員に話したい会話内容』」			
友人 $\alpha = .61$	1	生徒と友人との関係でうれしかったことについて	
	2	生徒と友人との関係での悩みについて	
学校 $\alpha = .79$	3	好きな科目のことについて	
	4	苦手な科目のことについて	
	5	好きな先生のことについて	
	6	苦手な先生のことについて	
	7	生徒と部活動の仲間、先輩との関係でうれしかったことについて	
	8	生徒と部活動の仲間、先輩との関係での悩みについて	
	9	部活動で楽しいと感じていることについて	
	10	部活動の練習や試合での苦勞について	
	将来 $\alpha = .79$	11	希望する将来の希望や望みについて
		12	進級や進路などの将来への不安について
13		10年後の自分がどんな人間になっていきたいかの人生プランについて	
14		進学費用などの具体的な相談について	
趣味 $\alpha = .71$	15	よく見るテレビ番組について	
	16	よく読む本について	
	17	よく聞く音楽について	
	18	最近、友達や周りで流行っていることについて	
家族 $\alpha = .91$	19	生徒と親との関係でうれしかったことについて	
	20	生徒と親との関係での悩みについて	
	21	生徒と兄弟との関係でうれしかったことについて	
	22	生徒と兄弟との関係での悩みについて	
	23	生徒と祖父母との関係でうれしかったことについて	
	24	生徒と祖父母との関係での悩みについて	
E 「教員が考える『生徒が教員から聞きたい会話内容』」			
友人 $\alpha = .83$	1	先生が学生の頃、友達との関係でうれしかったことについて	
	2	先生が学生の頃、友達との関係での悩みについて	
	3	最近、先生と友達との関係でうれしかったことについて	
	4	最近の先生と友達との関係での悩みについて	
学校 $\alpha = .85$	5	先生が学生の頃、好きだった科目のことについて	
	6	先生が学生の頃、苦手だった科目のことについて	
	7	先生が学生の頃、好きだった先生について	
	8	先生が学生の頃、苦手だった先生について	
	9	先生が学生の頃、部活動の仲間、先輩との関係でうれしかったことについて	
	10	先生が学生の頃の部活動の仲間、先輩との関係での悩みについて	
	11	先生が学生の頃、部活動で楽しかったことについて	
	12	先生が学生の頃、部活動の練習や試合で苦勞したことについて	
将来 $\alpha = .85$	13	先生が学生の頃の将来への希望や望みについて	
	14	先生が学生の頃、進級や進路などの将来へ不安だったことについて	
	15	先生が学生の頃に考えた10年後の自分がどんな人間になっていきたいかの人生プランについて	
	16	先生が学生の頃受けた、進学費用などのアドバイスについて	
	17	現在から10年後の自分がどんな人間になっていきたいかの人生プランについて	
趣味 $\alpha = .98$	18	先生が学生の頃、見たテレビ番組について	
	19	先生が学生の頃、読んだ本について	
	20	先生が学生の頃、聴いた音楽について	
	21	先生が学生の頃、友達や周りで流行っていたことについて	
	22	現在よく見るテレビ番組について	
	23	現在よく読む本について	
	24	現在よく聴く音楽について	
	25	現在、友人や周りで流行っていることについて	
家族 $\alpha = .99$	26	先生が学生の頃、親との関係でうれしかったことについて	
	27	先生が学生の頃の親との関係での悩みについて	
	28	現在の先生と親との関係でうれしかったことについて	
	29	現在、先生と親との関係での悩みについて	
	30	先生が学生の頃、先生と兄弟との関係でうれしかったことについて	
	31	先生が学生の頃の先生と兄弟との関係での悩みについて	
	32	先生が学生の頃、先生と祖父母との関係でうれしかったことについて	
	33	先生が学生の頃、先生と祖父母との関係での悩みについて	
	34	先生の夫・妻との関係でうれしかったことについて	
	35	先生の夫・妻との関係での悩みについて	
	36	先生と子どもとの関係でうれしかったことについて	
	37	先生と子どもとの関係での悩みについて	